

根本説一切有部

榎本文雄

初期のインド仏教は部派と呼ばれる十八前後の教団に分かれた。そのうち、インドのみならず、チベット、中央アジア、中国、日本の仏教において最も重要な役割を果たしたのが説一切有部とその部派で形成された諸文献である。一方、インド仏教文献には「根本説一切有部」という語が主にチベット訳や漢訳された律文献に見られ、そこに「根本説一切有部律」という大部の文献が存在する。この「根本説一切有部律」と説一切有部の『十誦律』は、他部派の律と比べ内容に共通点があるが、相違点も多い。従来、根本説一切有部と説一切有部の関係について種々の議論があったが、そこには根本説一切有部と説一切有部とは決して同一の実体ではないという前提があった。ところが、「根本説一切有部律」の注釈文献のチベット訳に、「根本説一切有部」とは諸部派の「根本」である「説一切有部」と明記されていることなどから、古来の文献における「根本説一切有部」は「説一切有部」と同一の部派を指していたという見方が成り立つ。ただ、義浄の『南海寄帰内法伝』中の「十誦律亦不是根本有部也」の一文は、この「根本説一切有部」と「説一切有部」の同一視と抵触しているように見えた。しかし、新たに考察した結果、この文は「根本説一切有部」と「説一切有部」の関係を明かすものではないと考えられるようになった。一方、「根本説一切有部律」を伝持している可能性の高い集団が、「根本説一切有部」と称しなかったり、「説一切有部」と呼ばれていたりして、「根本説一切有部律」と「根本説一切有部」と乖離しているような事例も認められる。説一切有部内の諸集団に関しては、集団そのものを主体にして文献を分類するのではなく、文献を主体にして集団を分類をした方が妥当であろう。